
誓いの言葉、彼女の口付け

きよこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誓いの言葉、彼女の口付け

【Nコード】

N1454C

【作者名】

きよこ

【あらすじ】

大好きな人が今日結婚する。彼は結婚式の最中、叫ぶ。「嫌だ！」と。

それは映画のワンシーン。

古い映画だった。タイトルもよく知らない。彼の父と母は仲良く肩を並べて、遠い記憶を辿るように、その映画に見入っていた。

真っ白なドレス。古びた教会。誓いの言葉。開け放たれる扉。かつて愛した人。差し出す手。ふわりと風をまとったドレス。走り出す二人。愛を信じて、手に手を取った。

彼の記憶には、それが鮮明な光となって残り。
彼はこの日を迎える。

生成りのレースが混じった白いドレスを纏った瑞穂^{みずほ}は、今日最愛の人と式をあげる。

「純白よりも少し生成りのドレスがいい」とこねた彼女がようやく見つけたドレスは、他ではあまり見ない、どこか古いヨーロッパを思い起こさせるものだった。純白のレースと生成りのレースが幾重にも重なり合い、散りばめられたパールが、陽光に当たって白く輝く。

今日の良き日を迎えるにあたり、最高のドレスだと、彼女は世界中の誰よりも幸せそうな微笑を浮かべる。

夫となる彰義^{あきよし}と足繁く探して決めた結婚式場は、格式高いヨーロッパの教会を思わせる荘厳な教会を有する式場だった。重厚な木造の建物は、築三年らしいのだが、築百年くらいに見えるように、わざと古びた様式にしてある。

赤や青、オレンジの光を透かす、イエス・キリストのステンドグラス。ツタが絡まったデザインのブロンズの十字架が、厳かな雰囲気気を漂わせる。

父、英介の腕を取り、瑞穂は教会の扉の前に立つ。この扉の向こうには、瑞穂を祝福するたくさんの親族や友人が待っているのだ。

「あなたは、瑞穂さんを生涯の妻と定め、健やかなる時も病める時も彼女を愛し、彼女を助け、生涯変わらず彼女を愛し続けることを誓いますか？」

彰義は少しだけ声を震わせながら、決意に満ちたまっすぐな瞳ではっきりと口を動かし、「誓います」と誓いを立てた。

司祭の青い瞳が、彰義から瑞穂へと視線を移す。

瑞穂は、小さく唾を飲み込んだ。待ち望んだ幸せを誓う日。夢のように、現実ではない気がして、そっと目を閉じた。

「あなたは、彰義さんを生涯の夫と定め、健やかなる時も病める時も彼を愛し、彼を助け、生涯変わらず彼を愛し続けることを誓いますか？」

閉じた目をゆっくりと開ける。飾られた白いバラと、手に持った百合のブーケが目飛び込んできた。司祭の白い髭に、栗色の毛が混じっているのが見えて、瑞穂は笑いそうになった。そのおかげで、緊張が解けた。瑞穂はふっと小さな息を吐き、夢見てきたセリフを口に出す。

「……誓います」

ふと横を見ると、たれ目の瞳を細くして優しそうに微笑む彰義の顔があつた。瑞穂は、涙が出そうになるのを必死にこらえて、彼に笑顔を送る。

彼は彼女のことを好きだった。この日を迎えることを知った日、彼は隠れてこっそりと涙を流した。彼女のことを心から好きで、結婚するのは自分だと信じていた。

いつ。いつの間に。彼女は自分以外の人と愛し合つたのだろう。彼女はいつも、自分の前で最上級の笑顔を見せてくれたし、「好き」といつも言ってくれていた。

他の誰よりも、彼女を知っていると思つていた。彼女が自分以外の誰かを想つていたなんて、信じられなかった。

初めて参列する結婚式が、彼女のものだなんて。彼には、この現実を受け入れることが出来なかった。

「この結婚に異議のある者は今のうちに申し立ててください！」
司祭が両手を広げ、参列者達に呼びかける。

異議を唱える者など、いるわけがない。静まり返つた教会の中で、彼は言葉を発するのは今しかない、本能で悟つた。花嫁を奪い去る、あの映画のワンシーンが脳裏をかすめていった。

彼はまっすぐに手をあげた。ゆらりゆらりとランプが灯つた天井

めがけて、彼の手は伸びていた。

「嫌だ」

彼は小さな声でそう言っていた。参列者達がざわつくのがわかって、彼は顔が真っ赤になっていくのを感じた。

恥じらいを捨てるために、彼はもう一度、大きな声で「嫌だ！」と叫ぶ。彼の隣にいた初老の女性が、彼の肩をそっと掴んだ。

「リヨウ君」

たしなめる響きを持った声が、彼の名を呼ぶ。彼はその手を振り払い、じっと、花嫁　瑞穂をにらみつける。

「リヨウ君……」

輪郭を覆うように曲線を描くマリアベールの奥で、彼女が哀しそうな顔で彼を見ていた。

彼はぎゅっと目をつぶり、泣き出しそうな声でつぶやいた。今、言わなくては。彼女は遠い、遠いところに行ってしまうのだ。

「瑞穂が好き。俺のほづがそいつより瑞穂のこと、好き」

ヴァージンロードを戻って、彼の立つ場所まで彼女はやって来る。彼女が手に持った百合のブーケの清廉とした香りが、彼の鼻先をくすぐった。

「ありがとう、リヨウ君。リヨウ君の気持ち、忘れない」

「行かないで」

情けない、そう思いながらも、声が震えてしまうことを我慢できなかった。彼女は彼の前にひざまずき、彼と視線を合わせた。生成りのレースと純白のレースが、ふわりと風を揺らした。

「ごめんね、リヨウ君。お姉ちゃん、リヨウ君のことも大好きだけ

ど、どうしてもそばにいたい人がいるの」

「行かないで」

わがままなのはわかっていた。けれど、彼女を手放したくなくて、彼は大粒の涙を零しながら、精一杯の気持ちを訴えた。

彼女の手が、彼の頬に触れる。白い手袋ごしに、彼女の温もりを感じた。泣き虫の自分が涙を流す時、彼女はいつもこうやって頬に触れてくれた。

「リヨウ君、ありがとう。私、幸せになるから。リヨウ君も、お姉ちゃん以上に大好きな人と、ここでいつか愛を誓ってね」

柔らかい感触が、彼の額に注がれる。ぼつてりとした彼女の唇は、彼の額に誓いのキスを落とした。

額がじんじんと熱かった。彼女の温もりを忘れたくなくて、彼は額を両手でそつと押さえた。

「ごめんね、瑞穂ちゃん」

「いいえ。大丈夫です、お義姉さん。嬉しかったから」

彼の母が、彼女に詫びる。母は相当怒っているのだろう。こんな場所で怒りを露にできないと、今にも生えてきそうな角を必死に押さえているのが、彼にはわかった。

「でも、せつかくの式をぶち壊したわ。この子ったら」

母の手が、彼のふわんふわんの髪の毛をかきむしる。優しくなでているようでいて、力のこもったその撫で回し方に、彼は口をへの字に曲げた。

「まだ五歳ですから。みんな、微笑ましく思っただけですよ。気にしないで」

見回すと、くすくすと笑う、参列者達の姿があった。彼はうつむいて、唇をかんだ。悲しくて、くやしかった。

彼女のドレスが揺れる。純白と生成りの向こう側に、燦然と輝く彼女の笑顔がある。

大好きだった。誰よりも。

誓った言葉も忘れない。

「瑞穂、いつか俺が結婚してあげるよ！」

叶わなかったけど。忘れない。

「彰義と瑞穂は、神と公衆の前で夫婦となる約束をしました。ゆえに私は父と子と聖霊のみ名において、この兄弟と姉妹とが夫婦であることを宣言いたします。神があわせられたものを人は離してはならない。アーメン」

司祭の低音の声が教会に響き渡る。

司祭に続いて、参列者達が「アーメン」と言うので、彼にはなぜその言葉を言うのかわからなかったけれど、彼もその言葉を大きな声で口にした。

「アーメン」

「バカ」

母の強烈なゲンコツが彼の頭を襲ったのだった。

(後書き)

つい最近、結婚式に出席しました。出会いもゴールも、そしてスタートも、すべて見た友人の結婚式を祝いつつ、こんなお話を妄想してました。

ほのぼのしていただけると、嬉しいです。
ご意見、ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1454c/>

誓いの言葉、彼女の口付け

2010年10月11日21時37分発行